2017年11月24日

木の根夢村

The Experimental Village:
An approch To Global Problem
Based on Agrarian Values
地球的課題の実験村

第70号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生　その６３

畑のマルシェって憧れ

中山　潤さん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

「鉄製のフェンスや機動隊の多さはたしかに異様だったけど、むしろ周辺に有機野菜の農家がたくさんあり、え？　って感じでした」。空港反対闘争など全く知らずに、ワンパックの研修にやってきた当時の三里塚の印象を訊ねると、中山さんはこう答えた。

空港反対闘争のことを知らずに三里塚に来る若い世代は、もちろん彼が初めてではない。１９７８年の管制塔占拠事件からでさえ、３９年もの時が流れた。中山さんもだが、あの事件の後に生まれた世代が、空港反対闘争や実験村とは関係なく農業体験に興味をもち、あるいは有機野菜に魅せられて三里塚を訪れ、ここで農業を始めるのも当たり前になった。

ただ、そんな「今どきの若い世代」の中でも中山さんは、ちょっと変り種だった。「畑に近い」って理由だけで木の根ペンションで借家住まいを始めて間もなく、彼は友人たちを呼び集めてバーベキュー・パーティを開いた。「高い鉄板の塀があって、飛行機の尾翼がすぐ近くを通り、監視する警官もいて…　スゴイところがあるぞ、来てみなよ！」。

私のような「闘争世代」には、「闘争拠点を封じ込む無粋な壁」にしか見えないペンションを取り囲む鉄の塀も、中山さんには「圧倒される面白さ」だった。だから自分で育てた野菜でバーベキューをしながら、そんな「面白さ」を友人たちにも楽しんでもらいたいと思ったのだ。そしてこれが、今では恒例になった「木の根ペンション音楽祭＝タイガー＆ドラゴン」を開催するキッカケだった。

実は中山さんは長距離と短距離をこなすアスリートで、大学ではスポーツ心理学を学んだ。陸上競技は自分自身との闘いだから、競技を介して自身と向き合う人間心理は興味深いテーマだった。そして少なくとも彼は、「本番に弱い」と言われた日本人選手のメンタルを、自分自身が楽しくなることで越えたかったのだろう。

そんな中山さんの思いは、就職先の小さな居酒屋チェーン店の企画・運営会社の仕事でも発揮された。お客さんが楽しめる繁盛店を構想し、企画し、調査・出店の実務から新店舗の店長まで、彼自身が多分に楽しみながら、おそらくは夢中だったのだ。そんな中で、有機野菜をおしゃれに盛り付けたワンプレートランチの人気や付加価値に興味をもち、少しばかりドラマチックに言えば、そのまま有機野菜の世界に魅せられ、有機農業の先進地・三里塚に「引き寄せられて」きたのだ。「野菜を見ながら畑に居ると、時間がすぐに過ぎちゃう」らしい。有機野菜の栽培でも彼は、やはり夢中なのだ。

プールも面白い背景もある。何か楽しいことが出来そう！　と「タイガー＆ドラゴン」をスタートさせて３年目、来年は地元の方々とも連携し、また少し規模を拡大すると言う。

「有機野菜の畑でコンサートを開く『畑のマルシェ』って楽しそうでしょ！」。そんな構想は私には、「楽しい実験村」の具体的な姿に思えた。

（文・佐々木希一）

現代につながる「問い」　佐倉・国立民俗歴史博物館『１９６８年』展をみて

金子美佐子（村民）

反戦運動や学生運動が、人々の共感を集めていた時代がありました。約５０年前の１９６８年。高度経済成長の中にあっても貧困や社会的差別が身近であった当時、世界的に高揚していた反戦運動や民主化運動は、変革の時代の到来を信じさせる大事件だったのでしょう。そんな中で彼・彼女らは様々な「問い」を発しました。

なぜ戦争に協力するのか？
なぜ人間を差別するのか？
なぜ平和な暮らしを破壊するのか？
そして、なぜ大学は不正を行うのか？

自分が直接の当事者でなければ、見て見ぬふりをすれば済むことばかりです。しかし、彼・彼女たちは問わずにはいられなかったのでしょう。自分のための過労と浪費を繰り返している現代しか知らない私にとって、そんなことを真剣に問う人々が本当にいたのか？！　と信じられない思いでした。

今回の国立民俗歴史博物館（歴博）の企画展は、そのような人々がかつて多様な形で存在していたことを実感させてくれる企画展です。企画展は二部構成で、第一部は「『平和と民主主義』・経済成長への問い」。市民による反戦運動として「ベトナム反戦運動」「神戸や福岡の反戦運動」、地域社会からの経済成長への抵抗として「三里塚闘争」「熊本水俣闘争」「横浜新貨物線反対運動」が紹介されています。第二部は「大学と言う『場』からの問いー全共闘運動の展開ー」となっており、東大闘争、日大闘争が主に紹介されています。普段なら国宝や高価な絵画や工芸品が展示されているケースに、ガリ版印刷機やヘルメット、きれいとは言えない状態のビラやパンフレット、旗が展示されている風景は、なかなか面白いですね。

１９６８年は社会運動が盛り上がった最後の時代と言われていますが、日本社会が抗議行動に寛大だったとは言えない、むしろ問うことを叩き潰そうとする力がこの頃も働いていたことがわかります。

水俣のブースには、僅かな補償金で終わらせ責任を取ろうしないチッソ水俣工場に、患者団体が闘いを続けていた姿がビラや写真などで紹介されています。その中に、同じ水俣市民からの中傷ビラや嫌がらせの葉書などが展示されています。「患者さん、会社を粉砕して、水俣に何が残るというのですか！」「運動で食ってゆく君達のことを考えただけで腹が立つ」。これは今風に言うならホームページの炎上ということになるのでしょうか。「神経痛かアル中に３０００万円は多すぎるよ」など、補償金をもらう人々への妬(ねた)み・中傷は現在とほとんど変わりません。

社会運動が共感を集める時代ではなくなりましたが、貧困や差別、戦争などが私たちの生活に迫ってくる時代になり、かつての「問い」が現代の「問い」として現実感を伴って現れようとしています。５０年前に解決できなかった「問い」は、私たちに託されようとしているのかもしれません。

１９６８年は過去の出来事ではなく、現代と地続きでつながっているのですね。

「１９６８年」無数の問いの噴出の時代展
国立歴史民俗博物館
千葉県佐倉市城内町１１７
ＪＲ総武本線：佐倉駅　京成本線：京成佐倉駅から徒歩
１２月１０日まで開催

目白押しの通商交渉の行方は？？

近藤康男（村民・「ＴＰＰに反対する人々の運動」世話人）

ＴＰＰはどこにいったのか？

１１ヶ国でＴＰＰ（とりあえずＴＰＰ１１と呼ぶ）の交渉をしていることは多くの人が知っている。この通信が届くころには“大筋合意”されているかもしれない。では元のＴＰＰの署名をしたまま、離脱の国内手続きをした米国はどうなっているのか？

どっこい、元のＴＰＰは１２ヶ国が合意署名したまま生きている（ＴＰＰ１２と呼ぶ)。米国も堂々の原署名国でいつでも復帰できる。ＴＰＰ１２の３０章・最終規定で加盟・離脱について決めているが、条約が発効してからの加盟と離脱の条件は決められているものの、合意署名から発効までのことは何も書かれていない。ＴＰＰ１２とは別物扱いでＴＰＰ１１の協議をしているのはこのためなのだ。

ＴＰＰ関連法はどうなっているのか？

法案は全て成立、ただし１～２本を除き、ＴＰＰ１２が発効することが「施行の条件」になっているので、ＴＰＰの国会承認と関連法は宙に浮いたまま。トランプ大統領がいる間はこの状態が続くしかなく、ＴＰＰ１１が合意書名されたら、新しい“条約”として国会承認（批准）をすることになる。１１月６日に「ＴＰＰプラスを許さない！　全国共同行動」が呼び掛けた政府との説明会・意見交換の場で、それまで曖昧な言い方をしていた政府側の出席者もそれを認めた。加えて関連法案も新たに成立・施行が必要とのことだった。

では逆にＴＰＰ１２とその関連法案はどうなるのか？　時間も無く、政府側の説明の口調もさらにあやふやになってきたので、この程度にしておいた。全くお粗末な外交交渉だ(他の国も含めて)。

互いに影響し合う目白押しの通商交渉

今、日本は「ＴＰＰ１１」「日欧(EU)ＥＰＡ」「ＲＣＥＰ（東アジア地域包括的経済連携)」「日米経済対話」の交渉を並行におこなっている。「韓米ＦＴＡ」と「ＮＡＦＴＡ」にプラス中南米・アジアの複数国をという新たな枠組みもそろりそろりと進みつつあり、日本が関係する通商交渉と互いに影響を与えながら進んでいる。

ＴＰＰ１１は、１１月８日の時点では政治的な大筋合意の可能性が半々だし、２０回目の交渉を終えたＲＣＥＰの年内合意は見送りとなり、日欧(EU)ＥＰＡは、投資の紛争解決制度を諦めて“暫定合意”になる見通しで、韓米ＦＴＡとＮＡＦＴＡは着地が見えない、といった状況だ。

協定から協定へと利害が絡み合う協定交渉は、魑魅魍魎(ちみもうりょう)の世界になりつつある。

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身のくらしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

○村民費　　３０００円
○麦大豆畑トラスト　５０００円
○通信購読のみ　　１０００円

郵便振替　００１４０－３－９２５５５　地球的課題の実験村

＜問い合わせ＞　電話／ＦＡＸ０４７６（２６）１６５４ 平野
メール：jikken-mura@jcom.home.ne.jp
ＵＲＬ：http://yamasoft.jp/jikken-mura/

第３滑走路－空港倍増計画の今

成田市東峰住民　樋ケ守男

「夜間飛行時間延長　断固反対　中台区」

黒と赤の太い字体、新しい白い看板は、縦１８０センチ、横９０センチ、２本の柱は鉄製で、その足元はコンクリートで固めてある。見るからに金をかけた行政区としての看板である。場所は横芝光町。南北・東西の２本の主要県道が交差する四つ角に建つ中台共同利用施設の前、Ａ滑走路南端から８キロ弱の騒音区域である。ちょうどコミュニティバスから降りてきたおばあさんに聞くと、『この夏、空港会社が出した２度目の提案の後に、区で決めて立てた。中台には３カ所あって、他にも木戸台と小堤も同じように何本も立っている』とのことだ。木戸台区と小堤区はここより東南、Ｂ滑走路の南側直下にあって、今は騒音区域ではない。が、新滑走路ＣはＢより約７キロ南にずれていて、ＢＣ独立運用となる機能強化案では「１時間に３２回の騒音が朝５時から深夜１時までつづく騒音区域」となるところである。行ってみると、

「安眠時間を減らす空港の機能強化　断固反対」

「私たちの静かな生活環境を壊すな　空港騒音断固反対」といくつもの看板が見える。

昨年９月に「四者協」が決定した機能強化案である「空港倍増計画」は、前号で報告したように各地区の説明会で批判が集中した。批判を受けて成田空港会社が今年６月に出し直した次なる案は、

①Ｃ滑走路供用後は、午前５時～午後１１時半と午前６時半～午前１時、２つの時間帯をＡとＢ・Ｃで定期的に交換するスライド運用で、各滑走路５時間半の静穏時間を確保する。空港全体で午前５時～午前１時の飛行時間となる

②Ｃ滑走路供用前、２０２０年東京オリンピック開催までに、現在Ａ滑走路で２２時台１０便の便数制限を撤廃し、２４時半まで３２便という「夜間飛行制限緩和」を先行実施する。防音工事などもＡ騒音区域で先行実施する

というものだった。成田市長などはこの「スライド運用案」を「熟慮された妙案」と高く評価、各市町村で再度説明会を開くとしたのだった。しかし、各地域では住民無視への反発の声がさらに高まっている。

各地区説明会の内容をねじまげ報告・集約

今回の「機能強化案」は、空港会社と行政（国・県・市町村）だけで審議、決定され、地域住民や学者・医療関係者などの参加を求める声は一顧だにされていない。そのかわり、関係各地区で丁寧に説明し、意見を聞いて「四者協」で決定するという。しかし、「説明会」の内容報告が空港会社や行政側に都合がいいようにしか書いてなければ、「住民の反対意見や異議申し立ては無い」として扱われることになる。

たとえば成田市が６月市議会空港対策特別委員会に提出した「説明会等主な意見・要望一覧」で、「平成２８年１２月１５日東峰・天神峰」を見ると、

〇騒音地域の人口減少により、集落の維持が難しい。

〇地元合意とは、何をもって地元合意と考えるのか。

としか載っていない。参加し、発言もした私たちからすれば、「何？　これ」である。

夜間飛行制限撤廃や騒音被害拡大への反対はいうまでもなく、住民不在の「四者協」の決め方、同時並行の羽田拡張案で打ち消される成田５０万回の必要性、工事費・防音対策費など数千億円の経費概算や採算性など一切計算しなかったという「事業計画」の杜撰さなど、３時間にもわたった会合での意見、異議申し立ては一言も書かれていない。

そして１１月２日夜には東峰地区第３回説明会がおこなわれる。

（１０月末日）

ジンバブウェの村から

水と土と種をめぐる「３つの闘い」

尾関葉子（村民　アフリカと日本の開発のための対話プロジェクト：ＤＡＤＡ代表）

ジンバブウェのネルソン・ムジングワさんが暮らすシャシェ村は、今年は過去１７年間で一番の豊作だった。シャシェ村はジンバブウェの中部にあり、２０００年に開拓された村で、２０１４年には実験村の石井恒司さん、平野靖識さんたちが訪問している。

しかし、その一年前はひどい旱魃（かんばつ）だった。多くの農家が食事に困り、番犬や牛やロバを売り払った。一年前だけでなく、過去１７年の中で雨がよく降った年は数回しかない。

ネルソンさんたちは農業指導をする目的でシャシェ村に入植したが、そのやり方はユニークで、「学校」という名前はあるものの、校舎や専用の畑は存在しない。あるのは農家の普通の暮らし。彼ら自身がそれぞれ一農民となり、その成果を見て学びたいと思う者が、寝食を共にして働きながら技術や哲学を学ぶ。

その根底には「センター・オブ・エクセレンス」という精神がある。それぞれの得意分野を生かした一人ひとりの暮らしの場とでも言おうか。ネルソンさんは水・土壌保全、仲間のアブマラクさんは石積み技術、おととし亡くなったチクワラクワラさんは伝統医療といった具合だ。

とはいえ、年間降雨量が４００ミリから５００ミリで、灌漑施設もないこの地域で、ネルソンさんや仲間たち自身が「成果」を見せるには長い年月がかかった。

ネルソンさんは、それを「３つの闘い」と表現する。水、土壌、そして種の３つだ。

水はすべて敷地内の溜池で逃がさず地中に蓄え、道路にたまる雨は水路を作り畑に誘導する。雨どいからの水もタンクにためる。土も、畑から流れ出ないよう工夫し、それでも流れ出る土壌はすくって畑に戻す。種は「自分の畑、この地域、親族、知人からの種以外は植えない」と決めている。

アブマラクさんは、世界遺産になっているグレート・ジンバブウェ遺跡にも共通する石積みの技術を使って壁や畝（うね）を作り、土壌の流出を防ぐ。主食のトウモロコシは石の保温効果のためか、地域で一番早く収穫できるまでになった。頼まれて他人の畑の石垣を積み、それを見た人から乞われれば、その家に自転車で行って指導する。

ネルソンさんは、ひとの手がいる時は地元の人を雇う。経済を地元で循環させたいと思っている。自分のやり方を見せたうえで、「彼らが自分の畑で真似るかは彼ら次第」と言う。

残念なことに、地元のシャシェ村で、このやり方はあまり相手にされなかった。近隣の村の人が先に関心を示した。そして面白いことに、その近隣の村の人に学んで、自分の畑に技術を生かしているシャシェ村の人が出始めている。ネルソンさんは言う。「誰が教えたかなんてどうでもいい。やる気のある人が成果を出し合って一緒に前進させたい」。

タイ　ヨーさんの村で

■この４０年はなんだったか

アジア農民交流センター（ＡＦＥＣ）のタイツアーに参加して、いま東北タイのヨーさんの村にきています。この４０年、タイの村はどんな変わり方をしたのか。今回の旅の最大のねらいは、それを知ることにありました。この４０年、タイの社会も経済も政治も大きく変わりました。ヨーさんというニックネームでタイ全土に知られる東北タイの農民バムルン・カヨタさんはその歴史の担い手であり、証人でもあります。

１９７３年のタイの民主主義民衆革命、１９７６年の軍事テロによる民衆革命の圧殺と活動家の虐殺、ベトナム戦争とその終結、経済発展とその裏返しとしての農村の疲弊、民衆蜂起といった様相を呈した小農民運動の高揚、タクシン政権の誕生と政治の混乱、度重なる軍事クーデターといったタイ現代史の激動を、ヨーさんはその渦の中心で生き、闘ってきました。９０年代、ヨーさんはタイ農民運動を代表する指導者でした。権力側から命を狙われ、常に防弾チョッキを身に着けて出歩く日々を送ったこともあります。２０００年代に入り、ヨーさんは再び地元に根付き、草の根から地域、農業を変えていく活動に精力をそそぎます。

政府が進める輸出型大規模近代農業路線に抗して、小さい百姓が安楽に生きていける農業を求めて有機複合農業を、地域の行政を巻き込みながら進めてきました。そんなヨーさんは、自身も村人として身を置く東北タイの農村をどう見ているのか。ＡＦＥＣ事務局長の松尾康範さんに通訳をお願いして質問しました。

ヨーさんは自身が率いてきた小農民運動について、それまでその存在すら見ようとしなかった社会が、村や農民に目を向けるようになったこと、農民自身が声を出すことで政府を動かすことができるということを知ったこと、の２点を挙げたのは、とても同意できました。では実際の村の状況はどうか。ヨーさんの答えは、厳しさはいっそう深まっているというものでした。

これまで東北タイの農民は農業と出稼ぎで生きた来ました。出稼ぎ先はバンコクからサウジアラビア、日本、韓国、台湾と海外に広がりました。いま、そのタイにミャンマーからの出稼ぎが広がり、逆にタイ農民の出稼ぎ先は縮小しています。さらに、農産物輸出国として生きてきたタイの農業にも影がさしています。経済成長はタイの労賃を押し上げ、輸出産品の競争力を奪っています。タイも参加するＡＳＥＡＮ（東南アジア諸国連合）の域内自由貿易はすでに動きだしていますが、タイはその中で最も不利な立場に立たされているというのです。これらは農家経済に影響し、農家の借金は急増、一時はなりをひそめていた暴力的な高利貸しの存在が目立つようになったということでした。

■ある複合農業経営

ヨーさんの話を聞いた翌日、村を歩き、何人かの農家をお訪ねしました。ヨーさんの仲間で複合農業を営むワート・グットラセンさんという５４歳になる農民は、台湾に出稼ぎに出た経験があるということでした。１９９７年に出稼ぎをやめ、農業に専念します。ヨーさんの運動の影響もうけて複合農業を手掛けました。現在、コメ、野菜、養豚、養魚、主として自家消費向けのニワトリ・アヒルという農業です。現在売り上げは年２０万バーツ余り。出稼ぎを止めても子ども２人を大学に入れ、それなりにゆったり暮らしている印象でした。子どもたちは大学卒業後、独立して外で就職しました。

もちろん村にはこんな農家ばかりではありません。ゴムを植えたが、生ゴム価格が下がり、１００万バーツに及ぶ借金をかかえて、厳しい経営状態にある農家でも話を聞きました。

男性ばかりでなく女性も外で働くようになっています。３０代までの女性で、村で農業をやっている人はおよそ２割ほどのようです。

農民運動の課題も、次の世代にどう代替わりするかだ、というヨーさんの前夜の言葉を思い出しました。

（大野和興）

夕立の森から

秋刀魚

山下茂

もうずいぶん前の話ですが、「ネットカフェ難民」や「年越し派遣村」が騒がれてからです。秋もふかまろうかという頃、東京は隅田川（すみだがわ）の土手を散歩していると、言問橋（ことといばし）の近くで、ボランティアの方々が炊き出しをしているのに出くわしました。隅田川の堤防の下（川側）は、ブルーテントの聖地なのです。やれやれ、ご苦労さまですとは声に出さずにエール。

ふと、川のほうに目を向けると、堤防の上で秋刀魚（さんま）を焼いているおじさん達を発見。それも七輪（しちりん）で。煙をもうもうとたてながら…。なんと贅沢な…、なんとうらやましい…、そしてなんと懐かしい…。

それ以来、いつか「七輪で秋刀魚」をと…、そうだ夕立の森で秋刀魚だ！　煙で飛行機が落ちることもないだろう、てなわけで焼いたのが数年前のことです。一緒に山仕事をしている矢口さんが焼くのをとくと拝見し、焼き方も教わりました。

そして、今年も焼きました。今年のはあまり太っていない秋刀魚でしたが、とても美味しく焼けました。

煙？　山では気になりません。ブルーテントの聖地がひろっていた快適な都会生活が失ったものを、夕立の森でもひろったのでした。

村民からの手紙

３２年の無農薬野菜とのおつきあいに感謝です

内海洋子（東京・文京区）

実践的な活動が１９９８年から２０年経ったそうですね。活動の一つ麦・大豆畑トラストに参加しました。約束通りには通っていないで、いただくだけが多かったのは大きな反省です。無にしないために私に何ができるのか。一度三里塚に泊まらせていただいて、一生の学びを人に伝えることか、と思います。

何年か前、椎茸の原木を移動し、森へ運ぶ時に参加し、森の中、人の手が入った森へ入った感触、忘れません。身も心も踊りました。

１９８４年に文京区・東大前で妹たち２人と、応援する人たちが始めた玄米定食屋「大きなかぶ」に、埼玉から子づれで（夫を残して）参加。下の妹が賛成してくれたので、徹底的に無農薬野菜を調理し、思うぞんぶんに食べていただく方に、弁当と定食を届けることができました。

薬のかからない食物を仕事にできたこと、生産者の方々に本当に感謝です。人はよけいなものが入っていない食物をいただくだけで病気から遠ざかり、一生楽しいと信じています。

一時は、ワンパック野菜をはじめ、他の生産者の方々におわびすることが起きてしまいましたね。山一證券が倒産したころのことです。店は何日も何日もお客様のいないガラガラが続きました。私は、長いこと支払いを延期せざるをえませんでした。申し訳ありませんでした。お客様にも助けていただいて、苦しい日々を切り抜けてきました。

人は助け合うものだと、私はそう望んで生きています。そして、必要なものは全部あたえられると信じています。私は２０１０年に店を引退しましたが、妹が今年５月に亡くなる直前まで続けてきた「大きなかぶ」は今年２月、３２年間の歴史を閉じました。

週刊金曜日の

三里塚闘争の地で今、何が起きているのかを読んで

荒川住民ひろば　吉沢千枝子

「三里塚の今」が対談で詳しく語られている。国、空港会社はさらに農地を潰し、空港を拡張しようとしていることに、心が重い。まだまだ厳しい闘いが続いている。しかし、生活に根付いた闘いがされていることも知り、さすが三里塚だ、と納得する。

当時、支援として活動していたが、あれから時が経っている。読んでいて「あれもあった、そう、これもあった」と思い出す。特に東峰裁判で実質勝利したこと、このときは思い切り泣いたことを思い出した。空港包囲１６キロマラソンに参加して、次の日から病院通いを始めたことなど。

三里塚の闘いで学んだことは、国家権力の暴力的な農地の取り上げに対し、反対同盟の体を張った闘いを見て、国家権力とはどういうものかを知ったこと。このことは私の人生を変えた。

今は三里塚の闘いの中から生まれた無農薬・有機栽培野菜の「ワンパック野菜」「有精卵」と、誌面に登場している石井紀子さんの「紀子パック」とを共同購入し、生活の一部となっている。年に１回開催されるワンパックの収穫祭に参加することを楽しみにしている。そこにも若い人達が農業を営み、子育てもして、生活している姿がある。

三里塚で暮らし続け、闘いの中でつかんだ有機農法をやりながら、気張ることなく淡々と暮らしている現地の人たち。若い世代も登場し、闘いは続いている。すごいことだと思う。

「村民からの手紙」　大募集です。

村民の近況、お知らせ、提案などなど、村民のみなさんからの手紙を募集中です。

現地の企画や行事になかなか参加できない村民のみなさんも、手紙でいろんなことを知らせて下さい。

【手紙の送り先】

〒286-0046　千葉県成田市飯仲２９７－４

平野 靖識

【編集後記】

「天候不順」が毎年指摘されるようになって久しいが、今年の夏場の野菜の高騰には、少しばかり驚かされた。すると「温暖化による異常気象」の話になりがちだが、単一作物の大量生産という「農業の近代化」が、農産物価格の乱高下に拍車をかけていることも実は深刻な問題だと思う。

気候変動にばかり農業被害の原因を押し付けては、これからの農業と営農にとっての不幸になりかねない。そんなことを考えさせられる夏だった。【Ｓ】

■編集・発行／2017年１１月２４日「地球的課題の実験村」
■購読料／年間1,000円（年３回）
■７０号編集担当／佐々木希一・平野靖識
■共同代表／柳川秀夫　千葉県山武郡芝山町香山新田２２
大野和興　埼玉県秩父市大宮５７３４－４